

ゼフ卵不作！

もうなんとなく慣れてしまったが、今年もゼフ卵は全国的に不作らしい。不作々と言いながら3年…こうなってくると無理やり原因も考えたくなる。こう長いと成虫も確かに少なくなってきたのを如実に感じるようになってきた。思い当たるのは地球温暖化が声高になってきたころからのような気がする。今年などは12月に入ってからアオスジアゲハやアゲハの報告がある。またヤマトシジミ、モンシロチョウ、ベニシジミ等は東京近郊でも12月中旬頃までふつうにみられるようになってきた。

春先のギフチョウの発生などもここ数年おかしいし、年間を通して蝶の発生（時期、個体数）等になにか乱れが生じているような気がしてならない。東京近郊の紅葉や落葉も確実に1か月以上遅れが目立つし、なにか季節が目に見えないところでめちゃくちゃになっているのかもしれない。このような状態がゼフの産卵に微妙に影響しているような気がするのとはあながち穿った見方ではないのかもしれない。

次の南の蝶の来訪は静岡まで来たサツマシジミかもしれない。ヤクシマルシジミはじわじわとくるが、サツマは三段跳びのようにやってくる。来年は関東へもと期待は大であるが、それが現存の蝶たちに与える微妙な影響を考えるとあまり彼らの来訪をぬかよるこびしてはいけないような気もする。昔のフジミドリシのような一枝に10卵以上などという大発生は再びおこるのであろうか？

日本蝶類学会

数年前ひょんなことから二分した蝶類学会であるが、なぜ、そうなったかわからぬ愛好者も多く、将来のためにも再統一して一本化という願いで一年近く代表者間の話し合いを持ったが、お互いどうしても払拭できない問題があってあと数年はこのまま行き、再度気運が満ちたら話し合うということになり当分は二分のまま行くことになりそうである。

一本化されたら再入会するという愛好者を何名か知っているのも、会員、資金ともに不足の両会にとっては険しい道になりそうである。ほぼ、両者とも日本蝶類学会を名乗り、その区分けは会報のそれぞれの表紙に代表される Butterflies fuji (A4) と Butterflies tengu となると思われる。共倒れにならずお互い切磋たくましつつ蝶界を盛り上げていってもらいたいものであるが、早い統一を願うのは愛好者として決して間違いではなく、当り前のことであるので、常にその気持ちを途切れさしてはならないが、その気運が永久にこないままという最悪のシナリオも大いに考えられるところである。

* 新入会員（宜しく願いいたします）

大屋 厚夫 〒701-0435 岡山市東花尻 229-1 T:086-293-6620 F:086-293-6821

Em:a.ohya17@isis.ocn.ne.jp



コガネムシの種類や数も異なってくる。種数が多いほど、その地域の自然環境は豊かと言えらる。ちなみに皇居では、23種類ものコガネムシが記録されている。土あるところにコガネムシあり。その存在が、その土地の自然を語る、という訳です。
(鈴木知之・昆虫写真家)

自然を語るバロメーター

07.9.6 読免(9)

日本には、コガネムシ科の昆虫が約360種類もいる。カブトムシやカナブンもコガネムシの仲間。天然記念物に指定されている種もある。初夏から夏の暑い時期にかけて、緑色に輝く美しいコガネムシをよく見られるでしょう。夜、窓を開けると電灯目指して飛び込んでくる茶色の甲虫も、コフキコガネというコガネムシの仲間。最近、僕の住む越谷駅前(埼玉県越谷市)では、コガネムシの仲間をほとんど見かけなくなった。なのに、高層ビルが立ち並ぶ新宿や池袋など都心には、数種類が棲んでいる。どうして? それは、都心には緑地公園、神社、寺、庭付き二戸建てなど土のある場所が意外に多いから。庭や公園の土と草木が、都心のコガネムシを養っている。アスファルトで覆われた越谷駅周辺は、幼虫期を地中で過ごす彼らの棲む場所が減ってしまっているのです。海岸や河原など、環境が違えば、そこに棲むコガネムシの種類や数も異なってくる。種数が多いほど、その地域の自然環境は豊かと言えらる。ちなみに皇居では、23種類ものコガネムシが記録されている。土あるところにコガネムシあり。その存在が、その土地の自然を語る、という訳です。
(鈴木知之・昆虫写真家)

コガネムシの

ひみつ

①



2種類の飛行能力兼備

コガネムシの飛行技術は極めて高い。例えばオオコフキコガネのオス。砲弾形の体形は高速飛行を可能にし、ジェット機さながらに薄暮の空を旋回する。触角のセンサーがメスのフェロモンを感知するとヘリコプターに変身。位置を確認するためフワフワとホバリングする。この二つの飛行形態は、ほぼすべての種に備わっている。天敵は鳥やクモなどが、水にも弱い。バケツの中でおぼれている姿を見たことがあるでしょう。また、何かの拍子にひっくり返ってしまったらアウト。ツメをひっかけられるものが無い、いつまでもジタバタとやっている。幼虫を観察して一番驚くのは、歩行能力の違い。コフキコガネの幼虫はゆったりと歩くが、ピロウドコガネやスジコガネ類の幼虫は頭を上下に振って勢いをつけ、猛烈なスピードで走る。まるでウサギとカメほどの違いがある。幼虫を捕るなら、ベストシーズンは秋。雨上がりの公園などで地面にモコモコと出ている小さな土粒は、コガネムシの幼虫が土を掘った跡。幼虫は土粒の真下に潜んでおり、3寸も掘れば簡単に見つかる。アリの巣やミミズのフンとの違いを見抜いて、ぜひ掘り出してみよう。
(鈴木知之・昆虫写真家)

コガネムシの

ひみつ

④

観察で街や自然の 変化が見えてくる



手製の図鑑と標本を手にする城野正幸さん—武蔵野中央公園で

「元FMラジオアナウンサー」
城野さんら手作り

07.10.24毎日

武蔵野市民の憩いの場、都立武蔵野中央公園（武蔵野市八幡町2）。ここに飛来するさまざまなチョウを、元FMラジオアナウンサーで西東京市在住の城野正幸さん（61）が手作りの図鑑にまとめ、近く公園のサービスセンターで展示する。公園のチョウを観る暖化の影響で「街や自然界の変化が見えてくる」という。

05年の夏、公園を訪れていた城野さんは、見慣れない色羽に黒い筋が入った「ツマグロヒョウモン」が舞っているのを見かけて「おや」と思った。図鑑でしか目にする「このな

「街の変化」によるチョウたちの栄枯盛衰もある。白い羽に黒い筋が入った「ツマグロヒョウモン」は、一般になじみが深く姿がよく似た「モンシロチョウ」に代わって勢

かった南方系のチョウ「ツマグロヒョウモン」あわて、捕虫網を手しチョウを追った。もともとは、小学生のころにチョウがテーマの自由研究をしたこともある愛好家。この都会の公園に、どんなチョウがいるんだろう」と好奇心が頭をもたげ、じつくりと観察することにした。

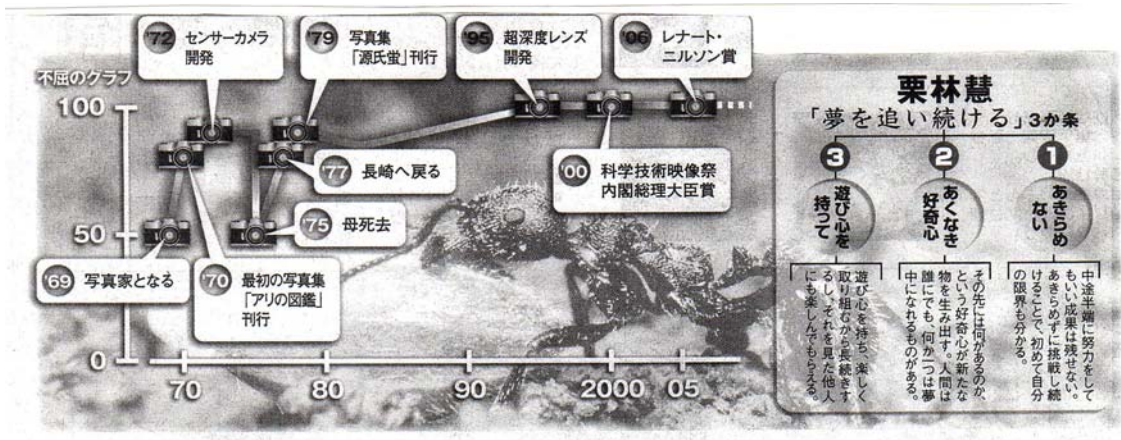
この2年で観察、捕獲したチョウは約40種類。ツマグロヒョウモンのほか、本来は九州、四国などに生息する「ムラサキツバメ」「ムラサキシジメ」もいることが分かった。昨年よりはやはり南方系の「ナカサキアゲハ」も見かけ、今後は数を増すのか注目している。城野さんは「これだけ暖かい地方のチョウが東京でも生息しているのは、やはり温暖化の影響でしょうか」と推測する。

「来園者に紹介できないか」と企画が持ち上がった。スタッフがチョウの写真撮影して城野さんと共同で30年ほどの図鑑にし、捕獲したチョウの標本とともに閲覧できるようにする。サービスセンターの林毅さん（39）は「都市公園のチョウをこんな形でまとめたのは珍しいのではないかと話している。」

【金田健】



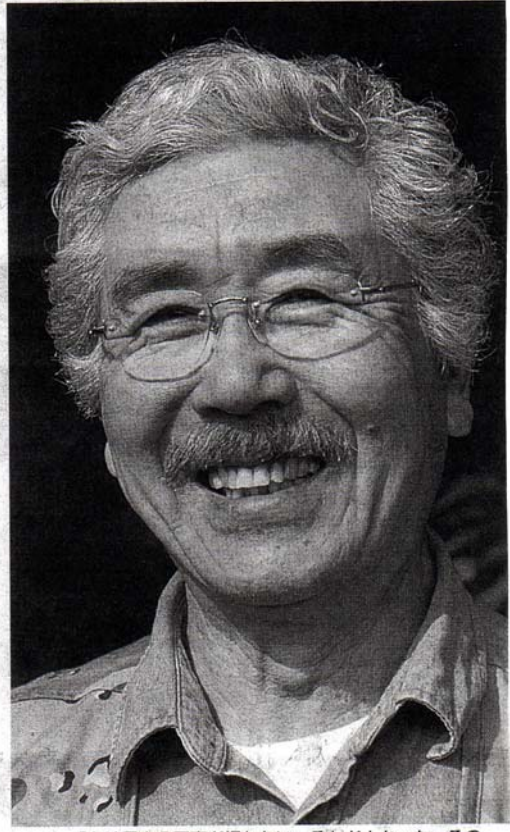
①ツマグロヒョウモン②ムラサキツバメ③モンシロチョウ—いずれも武蔵野中央公園サービスセンター提供



栗林慧 「夢を追い続ける」3か条

3 遊び心を持って	2 あくなく好奇心	1 あきらめない
遊び心を持ち、楽しく取り組むから長続きするし、それを見た他人にも楽しんでもらえる。	その先には何かあるの、という好奇心が新たな物を生み出す。人間は誰にでも、何か一つは夢中になれるものがある。	中途半端に努力をして、よい成果は残せない。あきらめずに挑戦し続けることで、初めて自分の限界も分かる。

昆虫の迫力 手製カメラで



「冬は昆虫の写真が撮れない。それがよかった。その間工作室にこもり、カメラやレンズを作れたんです」

栗林慧が撮る昆虫写真には、いつも驚かされる。アリの顔の超アップに、空中で停止したかに見えたトンボ、そして、まるで虫の視線から世界を見たような写真の数々。だが、もっと驚かすべきことがある。(この不思議な写真を撮ったカメラやレンズを作ったのは、栗林自身なのである。)

不屈のひみつ

写真家 栗林慧さん

1939年生まれ。自衛隊、生命保険会社勤務を経て69年、30歳でフリーの生物生態写真家になる。2006年、科学写真のノーベル賞とも言われる「レナート・ニルソン賞」を受賞。

からは休日たび、好きな昆虫を撮りながら楽しんでた。が、11歳で父を亡くし、母の手一つで育てられた身には、カメラを買って夢のまた夢。やっと手に入れたのは自衛隊に入ってから2年目、21歳の時だった。それ

が悔しくて。じゃあ、撮れるカメラを作ればいい。子供のころの「工作好き」の気持ちがよみがえり、ちよんちよんフラッシュ電球に代わって登場し始めた小型ストロボに目を付けた。強い光を瞬間的に絞らなければ、アリの動きをフィルムに収められるはず。ストロボを分解し、発光部だけをカメラに取り付けた。カメラ自体にも改良を加え、試行錯誤すること1か月。閃光が見事、アリのアップを写し出す。「25歳の時でした。これで、どんな虫も撮れると喜んだんですが……」。虫の

飛ぶ姿が撮れなかった。花や樹液の前で待っているのは効率が悪く、撮れたとしても羽の動きがブレていた。ならばまた、新しいカメラを作ればいい。光センサーを使った自動撮影装置を作る一方で、閃光時間1/4分の1秒というフラッシュの開発をメーカーに依頼。完成まで3年かかったが撮影は成功する。景色にもピンと以降も、改良したカメラ、レンズは数知れず。直径1cmの竹の中に卵を産むハチを撮るために使ったのは内視鏡レンズ。その際に、小さなストロボはピンと合う範囲が広いと気づくと、1995年、ビデオカメラのCCDレンズを応用した「超深度レンズ」を開発、手前には接写した方が大きく写りながら、遠方に広がる雄大な景色までもピンと合っているという、20年以上も前から夢見ていた作品を撮ることを可能にした。

村田雅幸、写真も